



Title	造形活動の理解に向けて：フィードラーとカッシーラー
Author(s)	石原, みどり
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43337
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	いし ほん みどり 石 原 みどり
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 1 6 7 0 6 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 14 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科芸術学専攻
学 位 論 文 名	造形活動の理解に向けてーフィードラーとカッシーラー
論 文 審 査 委 員	(主査) 助教授 藤田 治彦 (副査) 教 授 神林 恒道 教 授 上倉 庸敬 教 授 森谷 宇一

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は「造形的な眼」、「造形活動の現象学までの遠さ」、「人間の在り方の根底へ」、「造形活動の理解へ向けて」と題された四つの章からなっている。

絵画について、その造形上の魅力や内実を理解しようとするならば、次のように問わねばならないだろう。すなわち「必ずしも（芸術）活動に依らなくても獲られる成果は何か、反対にその活動を通じてしか達成できないものは何か」と。つまり、芸術家はその都度の活動のなかでのみ経験し得る事柄とは何か、また獲得し得る成果とは何か、ということが探求されなければならないのである。

このような問いを發したのはK・フィードラー（1843-95）である。周知のようにフィードラーは近代芸術学の父と目され、絵画の近代化、すなわち何をどのように描くかを画家が自由に決定するようになったという意味での自律化に理論的基礎を与えた人物であるとされる。しかし、彼の理論は近代の芸術学および美術史研究上の歴史的意義を有するものにとどまらない。フィードラーは、芸術について知ろうとする人々の眼を、芸術作品のもつ効果から造形活動の過程へと向けさせ、そこに造形芸術の本来の意義と価値を見出すことを教える。

本論では、フィードラーの造形理論ならびに彼の研究態度を吟味し、そもそも造形芸術を理解するとはどういうことか、またそれがいかにして可能なかを考察している。フィードラーによると、画家がその特殊な活動を行うのは、可視的世界をもっと明瞭に展開させて眼にしたいという「眼の認識欲求」を満たすためである。そして、ものをかたちづくる手によって、眼はさらに強められ、能動的になり、そしてこの眼に対しては新たな世界が視覚化されていく。このような視覚の理論の基礎にあるのはカントの認識論およびフムボルトの言語論であり、フィードラーはそれらを眼の領域へと転用したとされる。ところが、作品を理解し、受容するという段になると、フィードラーの画家中心主義、視覚中心主義が逆に足枷となる可能性が出てくる。

そこで本論では、E・カッシーラーのフィードラー批判およびG・ベームのフィードラー理解を参解しながら、具体的に造形活動を解釈しようとする際に、また、受容者（非芸術家）が芸術家に追隨して活動の過程を経験しようとする際に生じる困難および、その発生の背景を検討している。実のところ、カッシーラーはフィードラー批判に徹しているわけではなく、フィードラーをむしろ彼自身の「芸術考察における保証人」（H・ペッツォルト）として引き合いに出しており、両者は基本的なところでは一致している。このような理由から、本論では、さらにカッシーラー自身の文化哲学へと考察を広げ、フィードラーが残した問題を検討し、フィードラーの思想とカッシーラーのそれと

を相補的に付き合わせて、造形活動を理解するための望ましいあり方を探求している。

論文審査の結果の要旨

本論文の目的は、フィードラーの造形思想とカッシーラーの哲学との比較を通じて、19世紀にフィードラーが発した問について再考し、造形活動についての理解の深化を計ることである。このフィードラーとカッシーラーとの比較論考という論文のテーマ自体、フィードラー研究を積み重ねてきた学位申請者独自の設定によるものであり、このことがまず評価されるべきである。

本論では、まず、カッシーラーがフィードラーの芸術論集（1909）を読んでいた事実を遺稿などから明らかにした上で、古今の美学に関する学説や芸術理論のほとんどを批判のための踏み台としているカッシーラーが、その芸術思想において、フィードラーの芸術論と基本的なところでは一致していることを指摘している。さらにフィードラーが、芸術作品のもつ効果よりも、造形活動の過程に造形芸術本来の意義と価値を見出していることに注目しているところも、本論の重要な視点の一つである。

以上のような目的をもって、いくつかの視点を設定して研究を積み重ねた結果、本論は、カッシーラーを通してフィードラーを読み直すことによって、「純粹視覚の理論」というレッテルの陰に隠れていたフィードラーの思想を理解しようとしている。つまり、フィードラーが言語活動とのアナロジーで芸術活動を捉えていることを手がかりに、造形活動を理解する可能性を見出せたとしている。

この結論は、結局、造形芸術を言語活動とのアナロジーとして捉えることになるのではないかという反論を呼ぶものではあるが、フィードラーは、コミュニケーション手段という機能よりも、世界を構築し、存在せしめる働きとして言語を考えているのであり、その点では芸術活動も同様であるとしている。つまり、言語活動が芸術活動に優先してなされていると考えているわけではない。フィードラーは、言語についての議論や考察が（例えばフムボルトなどによって）先行的になされて成果を挙げており、芸術も同様に然るべきかたちで扱われ、考察の対象とされるべきである、とも論じている。本論文においては、造形言語が普通の言語とどのように違い、特殊なものであるかが、必ずしも十分に論じ切られているとは言えないが、言語活動とのアナロジーからでは把握できない芸術活動の特殊性も指摘され、行き届いた考察が行なわれている。以上のような理由から、本審査委員会は一致して、ここに本論文を博士（文学）の学位を授与するに値するものであると認定する。